

生と死と愛の深み

## 川端康成の聖書

鈴木範久

すずきのりひさ 立教大学名誉教授

## 三冊の聖書

立教大学で「聖書と日本文化」展が開催されたのは、一九九九年秋のことであった。そのとき、川端康成の聖書を三冊お借りすることができた。その三冊とは、文語訳が『旧約聖書 引照付』（米国聖書協会、一九三五年三月三〇日）と『新約聖書 詩篇付』（米国聖書協会、一九三五年九月三〇日）の二冊、口語訳が『聖書』（日本聖書協会、一九五五年）の一冊であった。文語訳の『新約聖書』の裏表紙には、次の記入がみられた。

昭和拾年十二月六日之れを求む



チェックの記された『聖書』  
（日本聖書協会 1955）

また、口語訳の『聖書』にも次の文字が記されていた。

軽井沢一三〇五 川端康成

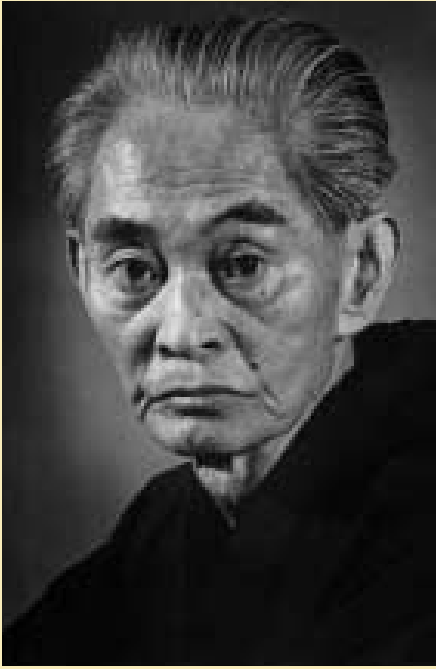
いずれも川端自身の手で書かれたものとみられる。文語訳は一九一七年に

改訳されたものであり、口語訳は、一九五五年に新約聖書について旧約聖書の口語訳も成り、両者を収めた一冊本である。文語訳本が黒色の表紙であるのに対して、口語訳本が真っ赤な表紙であることに目を見張った。

## 川端康成とキリスト教

川端文学というと、東洋的作風が連想される傾向だったが、このところ、作品にあらわれるキリスト教または聖書の要素がかえりみられるようになってきた（松坂俊夫、武田勝彦などの研究）。

川端が最初に教会に行ったのは大阪の中学時代であるとみずから語っている。ただ中学時代は、聖書には接した



写真提供／©柿沼和夫氏

が、英語を聞きに行った程度であった。上京して第一高等学校に入学すると、近くの東京帝国大学基督教青年会館に出入りするようになる。これまでの研究によると、作品における聖書との結びつきがかなり認められるのは、一九二五年前ころといわれる。それは短編「弱き器」（一九二四年）の題名にもあらわれている。一九二四年という年は、川端が東京帝国大学を卒業した年になる。

この時期の作品に聖書の言葉が多く認められることよりみて、当然、聖書も所持していたであろうが、遺されていない。右にあげた文語訳聖書が購入された一九三五年は、「雪国」を執筆中である。しかし、病気がちで、入院を繰り返していた時にあたる。

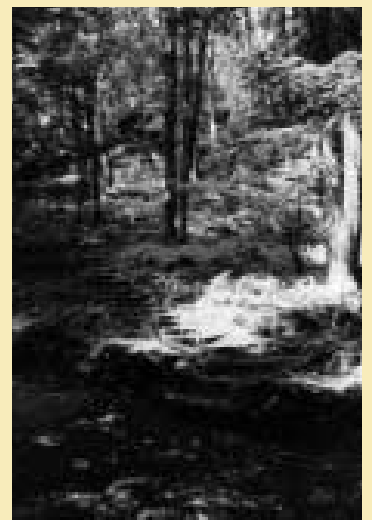
### 遺された聖書から

川端が、改めて聖書に親しみ始めたのは戦後である。それは一生変わらなかつた。川端文学におけるキリスト教の影響は伊藤整により初めて指摘された。伊藤は、その作品に、バイブルをよく読んだ痕跡と、野の花や幼子のあどけなさに生命をみたイエスのまなざしを見いだしている。

前述した三冊の聖書のうち、文語訳の『旧約聖書』には付箋の挟み込みがみられ、口語訳の『聖書』には創世記の部分にのみ欄外にチェックが付されていた。付箋のほうは、川端家からも動かさないようにとの依頼があつた。それでわかるように、生前の川端自身が挟んだまま伝えられたとみなされる。ここでは『旧約聖書』の付箋の挟み込まれたところだけ紹介したい。少し日が経っているので正確ではないかもしれないが、あつたのは次の五箇所である。

出エジプト記四―五章、申命記三四章―ヨシユア記一章、列王記略上一―二章、詩篇一一九篇、雅歌二―四章

ここで気づかされる点は、申命記の終章からヨシユア記の冒頭にかけては、モーセの死とヨシユアによる事業の継



軽井沢の山荘

承、列王記略上の初めは、ダビデの死とソロモンによる王位継承である。大いなる者の死はあるものの、それを受け継ぐ新たな者の生のドラマが描かれている。雅歌は名高い愛の賛歌で、作品「父母」に用いられている。

ちなみに、堀辰雄は、川端の軽井沢の別荘を借りていたとき、その家にあつた川端の聖書で詩篇を読み、『風立ちぬ』の中の「死のかげの谷」を書いたという。川端の別荘のあるあたりは「幸福の谷」と呼ばれるところである。堀は「幸福の谷」で「死のかげの谷」を書いたことになる。その「死のかげの谷」の文章は、のちに川端の作品「地」に引用された。どうやら、川端文学の生と死と愛の深みは、親しんだ聖書とのつながりに行き着くように思われる。